

まちを読み解く

写真は「景観・歴史・地域づくり」という副題の西村幸夫・野澤康編の2017年10月刊行の書。29地域の実例がコンパクトにまとめられ、参考になることが多い。

とりあえず西村著の序章「まちをどのように読み解くか：調査の方法」と「調査から地域づくりへ」を抜粋して紹介したい。



本書においては、とくに「事実を知る」と「現場に立つ・考える」という調査の組み立ての部分を中心に実例を紹介している。

まずは現地を歩くことが不可欠であるが、詳細なフィールドワークに取りかかる前に必要なデスクワークがある。事実を知ることの具体的な内容は、「歴史を知る」、「地形を知る」、「空間を知る」、「生活を知る」、そして「計画・事業の履歴を知る」という作業からなる。

「歴史を知る」ことは、地域の背景を知る意味で基本であることはいうまでもない。そのためには古い絵図や古い地図、古い航空写真などが手がかりとなる。そこから地域の地形などの自然的な要素と、地域の骨格が形成されていく過程などを知ることができる。すなわち「地形を知る」ことと「空間を知る」ことにつながっていくのである。これによって街路の形状や空間の構造などを理解することができる。

並行して、「生活を知る」ための調査がある。たとえば、人物や生業に焦点を当てる調査のほか、祭事や行事、生活空間のあり方、さらにはひとびとの記憶の調査、古い新聞記事のレビューなどもありえる。

「計画・事業の履歴を知る」ことは、とくにこれから新たに計画や事業を実施していくことをめざしている場合には欠かせない情報となる。土地利用の転換や道路パターンの変化などを明らかにすることによって、地域の骨格がいかに形成されてきたかを総合的に理解することができ、これからの地域づくりの方向感覚が養われることになる。

続いて現場に立つ・考える作業となる。まず、調査目的に合わせた各種の分布調査がある。本書では、地域固有の景観調査や各種の建築物、産業遺構、樹木、石垣など、地域の個性に対応して多様である。

また、現代的なアーバンデザインの実際や調査者の主観による印象的な景観など、多様な分析方法がありえる。

さらに、地域の生活者から直接ヒアリングをすることやアンケート調査のほか、世代別ワークショップで意見を引き出す工夫なども状況に応じ必要となる。

いずれにしても、いかに地域と寄り添うかという調査者の姿勢が常に問われている。「まちを読み解く」とはたんに都市の調査を中立的な立場から実施するということを越えて、いかに対象地域の実態を実感を込めて理解しえるか、ということの意味している。調査は現場に触れる第一歩であり、同時にそれは地域の実情と格闘する実践的な計画行為の第一歩なのである。

(2018年5月7日)